
鏡の向こうのアシンメトリ

刑部 科

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

鏡の向こうのアシンメトリ

【Nコード】

N4522N

【作者名】

刑部 科

【あらすじ】

何時の頃からか、都に広まった『奇病』。それは、眠ったまま目覚めず、やがてはどこへとも知れぬところへ姿を消す病だった。そんな奇病に冒されたイレイは、夢に落ちて……。きつとこれは、罰なのだ。許されぬ思いを抱いた自分への。シリアス。エロリ風味。

01 - 1 : 夢に落ちた日 : イレイ side

光が瞬いた。

『様！……じ様！気づいたら返事をなさって！』

闇の中。

ちらちらと光球が点滅している。

鈴の降るような可憐な声がイレイの耳に届いた。

「……。」

いつの間にか寝ていたらしい。

声に刺激されたイレイは、ゆっくりと目を開いた。

どこか珍しい紫の色をしたイレイの瞳に、光が点滅しながらぐるぐると自分の周りを旋回しながら距離を詰めてくる様子がうつる。

『おじ様……このあたりにいるのでしょうか？気づいたら返事をなさって……！』

不安を抱えたような少女の声。

聞き覚えるのある声に、彼は確認した。

「ヨウラ、お前か？」

『ええ、わたくしです。やはりそこにいらしたのね。』

近づいてくる光に、イレイはそっと指先を伸ばした。

まるで蝶が花に止まるように、そっとイレイが伸ばした指先へ光が留まる。

『ああ、よかった。漸く見つけましたわ。』

可憐な声が、イレイの鼓膜を振るわせた。

声は光から発されているようだった。薄青から桃色、桃色から薄緑と光は刻々と色を変えていく。幻想的な光景だった。

まるで、夢の中のような。

「漸く？私がどうしたというのだね？・・・いや、寧ろお前は今どこにいるのだ？確か先程まで私の傍にいたはずだね。」

そう、先程まで自分はこの声の持ち主と、共にいたはずだ。年よりも大人びた少女に、いつものように女癖の悪さを叱られた後、ご機嫌取りのために彼は一緒に買い物にかけた所までは覚えている。

その後、山のように少女のために服や小物を買ってやらうとするのを止められた後、アイスを二人仲良くわけあって仲直りしたはずだ。

その後・・・屋敷に戻って・・・。それで？

『嫌ですわ、気づいていらっしやいませんか？ おじ様は今、夢の中に取込まれておいでですのに。』

01 - 2 : 夢に落ちた日：イレイside

少女に指摘されて、彼は漸く異変に気づいた。

自らの身が見覚えのない場所に置かれていることに。

周囲を見渡せば、見慣れない平原だ。地面に這う草はみずみずしい色が抜けて、枯れた色をしている。

空は淀んだグレイ。

なんと寒々しい光景なのだろう。周りには枯れた草と、ごっごつとした石ころ、乾いた土しか見えなかった。

そもそもが・・・彼の知っている少女はまさしく「少女」の姿をしているはずであって、こんな光などではない。

この光は確かに少女がらみで過去にみたことがあったため、さほど疑問に思わなかったというのもあるとはいえ、思考までもが鈍っていたのか。

『今、都に流行っている奇病を存じていらっしやいましょう？』

少女の言葉に、そういえば、そんなこともあったと思い出す。

身近に罹ったものがいなかった為、関心をもっていなかったことが悔やまれる。

臃げな記憶を辿り、なんとか『奇病』に関する情報を頭の片隅からひっぱりだした。

確か 眠ったまま目覚めず、やがてはどこへとも知れぬところへ姿を消す病。

『おじ様はわたくしと出かけた日のことを覚えていらっしやる？あの日おじ様は、帰ってから直ぐ、倒れておしまいになったんですの。凄い熱が出て、昏睡状態に入った後・・・熱が冷めても目覚めなく

なつて。先日のことですよ、ついに姿を消しておしまいになったの。」「先日？」

言葉の中に不穏な単語を感じて、彼は聞き返した。

『そうですよ。先日・・・おじ様が倒れてからもう1月が立ちましたの。』

「一月も？」

少女と買い物を楽しんだのはつい先程のことのようなのに。

一月だと？

『ええ。おじ様が消えてからは半月ですよ。その間、必死に探しました。巫女の座は返上して次代に譲り渡した今、もはや只人に毛の生えた程度の力しか持ちえないわたくしですが　おじ様の為ですもの』

持っているときはこんな力などいらなと思ったものなのに、無くなつてから必要になるだなんて皮肉ですよわね。

自嘲する様に、少女はそう呟いた。

「そうか。心配をかけた。それで、私はこれからどうなるのかね？」

『今のところはわたくしも何もできません。おじ様を夢の中から戻せる方法も、今必死で調べさせておりますわ。必ず、こちらに帰つて頂けるように。』

「ヨウラ、無理はしないでいい。・・・確かにわけのわからない場所に放り込まれて不安は感じている。・・・だが、お前に無理をさせたくはない。10のお前は学業と遊びに専念していればいいんだ。私のことなど心配しなくていい。そんなことのために引き取つたのではない。」

『おじ様、わたくしがしたいから、しているんですの。見くびらないで！義務感や義理・・・まして恩を感じて探しているのではないですよ。近しい肉親は貴方だけでしょう？心配して何がいけないんですの？・・・わたくし達、たった一人の従兄妹ではありませんか・・・ねえ、イレイ。』

従兄妹。

そう、彼女と自分との関係は従兄妹。

決して叔父と姪の関係ではない。それよりはもっと遠い関係。おじ様と呼べといったのは自分だ。

年が離れているから、まるで少女をかどわかす悪い男に見えてしまうから、名前ではなくおじ様と呼んで欲しい。

冗談めかしていったのは少し前。彼が両親をなくした彼女を引き取って、暫く経ってからのことだった。

初めは納得の行かないような顔をしていた彼女も、やがてそれに慣れ、自分のことを「おじ様」と呼ぶようになった。

お互いに両親をなくしたもの同士。

近い血縁で、現在も生存しているものには祖父母がいたが、遠い外国で暮らしている上、連絡もなかなかとれなかった。

遠い分家の親戚なら山ほどいるが、直径の血を引くものは自分と彼女だけ。

一族に伝わる不可思議な【力】に触れる機会を得たのも彼女と彼女だけ。

そうした繋がりが、彼女と自分の距離を近くしていく……近く、なりすぎた。

彼女はまだ十で、自分は二十九の年を数える人間だ。倍どころか、彼女は自分の3分の1ほどしか生きていない。

それなのに自分は。

気が付いたら、彼は不特定の様々な女と口付けを、あるいはそれよりも深い関係を結ぶ身に落ちていた。

どれほどの数の女と不道德な関係をもったのか、彼も覚えていない。

怖かったのだ、自分がもしかして……。

『イレイ？』

名前を呼ばせないのは防波堤だ。

少女と自分をこれ以上近づけないための。

そうでなければ、きつと、彼は取り返しの無い事をいつかしてしまいたいから。

『イレ……おじ様？お加減が悪いの？それともご機嫌が悪いんですの？お名前をお呼びしたから……。』

「ああ、なんでもない。少し状況把握に戸惑ってね。」

『確かに、無理もありませんわね。少し、辛抱なさってくださいませ。必ず、おじ様が戻るようにいたします。』

「……そうか、お前が言うなら。任せるよ。」

『ああ……そろそろ、意識が……。わたくしももう戻らなくてはならぬようですわ。また、参ります。必ずや。』

「ああ、約束だ。」

『きつと』

少女の声がフェードアウトし、光は唐突にぱつと姿を消した。後には静寂とどこも知れぬ光景がイレイを取り囲んでいた。

02 - 1 ・歪んだ時間：イレイside

『おじ様・・・もう朝のようすわ。起きてくださいな。』

「ヨウラ？ああ、すまない、仕事の準備をしなくてはならないな。」
のそり、と気だるげにイレイは身を起こした。

『・・・夢の中でも、寝ぼけるといふことがあるんですね。』

言われて、【昨日】の出来事が蘇る。

よくよく見れば、周りは寝台などではなく、草むらだった。相変わらず枯れた色。

心まで枯れそうなその色から、イレイはすぐに目を離した。見て
いるだけで、気が滅入る。

枯れた草から目を話した後、彼は正面を向いた。

目の前には光の球がちらちらと瞬いている。昨日と同じだ。ヨウ
ラの声はそこから聞こえてきていた。

『おじ様、お目覚めになられました？』

「・・・ああ、今、目が覚めた。夢の中なのに目が覚めるとは妙な
気分だが。やれやれ、昨日は草むらなどで寝たせいか、体が痛む気
がするよ。ヨウラ、お前は元気かね？」

『わたくしは元気です・・・と申し上げたいのだけれど。』

「・・・ど！？風邪でも引いたのかね？昨日、お前に無理をさせた
から。」

既に、彼女の中に残っているのは【力】の残滓だけだ。

きつと、搾り出すようにして無理に【力】を使っているに違いな
い。

【力】の無理な行使は体力を奪う。

よもや、そのせいで病を得たのではあるまいか。

『ああ、違うのです。病など得ておりませんわ。そうではなく・・・その前に確かめさせて頂けるかしら？』

「何をだね？」

『おじ様の中で、わたくしにあつたのは昨日、それで間違っただけじゃありませんわね？』

「ああ、確かだ。だが、お前のその口ぶりからして・・・何かあると思つてよいのかね。私にとっては間違いなく昨日なのだが。

・・・お前には違う。そういうことか？」

『・・・ええ。あれから、半年がたちました。わたくし、今日が誕生日ですの。』

半年。

一年の半分。

それだけの月日が、この一日の間に流れていたと？

『ごめんなさい、おじ様。半年もこちらではたつておりますのに、そちらからお呼びできなくて。都では漸く病の原因らしいものも特定しつつあるそうですが、治療法のほうとなると未だに手がかりも見つかっておりませんの・・・』

しゅんと意気消沈したヨウラの声が響く。

きつと、もし顔が見えれば、俯いて唇をかみ締めているヨウラの姿が目に入ったはずだ。

「いや・・・いいのだよ。ヨウラが気にする必要はない。」

ヨウラが気にする必要はないのだ。

きつと、これは罰だから。

殆ど自分の子のようなお前に焦っていた、自分への罰。

夢の中で、十のお前を何度穢したとか。

浅ましい願いを抱いた己へ、とうとう下された罰なのだから。

02-2・歪んだ時間：イレイside

初めは、自分は子供に欲情する変態なのかと思った。けれども、ヨウラ以外の子供を見てもなんともなかった。ほっとした。

ちよっとした気の迷いなのだろうと。おそらく、某かの流行小説や芝居の影響を受けたのだろうと。

依然として欲望の対象は、成人女性だった。

けれども・・・何度も見るのだ。

夢の中の自分は裏腹に・・・ヨウラを思うままに嬲っていた。

上気した肌を撫で上げ、自らで貫き・・・達していた。

起きて自らのみた夢に絶望したのは、一体何度あるだろう。

ヨウラに窘められても女遊びを止められなかったのは、自分がいつか彼女に夢の中ではなく本当に手を出してしまうことを恐れたからだ。

ヨウラ。

『一生懸命お探しします。おじ様が戻っていらっしやる方法を。だから、おじ様、必ず待ってくださいませ。例え・・・たとえ何年かかるかと必ず。』

可憐な声で、一生懸命に訴えるヨウラに罪悪感を覚える。

ヨウラが気にかかる必要などないのに。

ああ、お前は、本当に優しい子だ。

「いいのだ。いっそ・・・忘れてしまっても構わない。」

半年。大きな時間。この世界での一日が、向こうの半年であるというのなら。

きっと、ヨウラはあつという間に大人になる。

そのうち、自分がいないうちに、恋人を作って結婚して子供ができて年をとって・・・きっと忘れてしまう。

いや、忘れてしまったほうがいい。自分のことなど。

想像するだに心臓に突き刺さるような痛みを覚えるが、ヨウラの為にはそれがきつと万全だ。

二周りも年の離れた子供を夢の中とはいえ欲望の対象にするような男が傍にいるよりは。

「早いうちに忘れてしまってくれ。・・・ただ、願わくば、お前の幸せを祈っている。」

『そんなこと！そんなことできるわけございませんわ！わたくしのわたくしのせいなのに！』

「ヨウラのせい？・・・私の行いが悪いせいに決まっているだろうに」

ヨウラと最後に買い物にいった日のことを思い出す。

自分にとってはほんの数日前の出来事だったから、鮮明に思い出せた。

きつとヨウラはあの日のことをいつているのだ。

女癖の悪さを彼女に叱られた後、ちょっとした諍いになった。

その時のことをきつといつているに違いない。

「おじ様なんてどっかいつてしまってくださいませ！」

彼女はイレイに向かってそう言い放っていた。

きつと、その言葉がこの事態を引き寄せたのだと思っているのだろつ。

「お前の言葉が原因などではないよ。普段からお前に叱られていただろつ。きつと、神様が余りにも私の行いが悪いと判断されたのだよ。仕置きが必要だと考えたんだろつね。だから気にしなくていい。お前を悲しませているとわかったら、私の行いの悪さに磨きがかかったと判断されて、今度は神にどこに連れて行かれてしまうかわかったものじゃない。」

『いいえ、そうではないのです！そういうことではなくて、わたくし……』

「ああ、そういうえば、いつていなかったな。御誕生日おめでとう、11歳になったのだね。また一つレディに近づいたかな？」

何か言葉を続けようとするヨウラを遮った。

ヨウラも私の言葉で、これ以上この話題を続けたくない心情を悟つたのだろつ。

大人しく、

『ええ、11になりましたわ。』と続けてくれた。

どこか、声が涙混じりだった気がするが、ヨウラの顔が見えない今、それが真実かどうかを確かめる術はない。

02-3 歪んだ時間：イレイside

「・・・そろそろ、時間かな？」

光球の光がだんだんと弱まってきた。

昨日も光がだんだん弱まっていき、ぱっと消えて少女の声が聞こえなくなったのだ。

『ええ・・・もうそんな時間ですのね。やっと半年振りにおじ様のお声を耳にできましたのに・・・。寂しゅうございます。』

「いいんだ。次は半年後だろうか？」

『なんとかもつと早くにお会いできればと思っておりますが、わたくしの力ではそのスパンが限界のようです。』

「・・・忘れても、恨まないから。お前は、自分が幸せになることだけを考えればいいのだよ。」

『忘れなんてしません・・・！』

今はまだ半年だから。だからそう思えるのだろう。

それが何年も続いたら、イレイのいない現実に慣れるだろう。

そうしたら、きつと忘れるだろう。あるいは夢だったかもしれないと思うのではないだろうか？

けれども、優しい娘にはそういう思いは告げずに。

「そうか、ありがとう。・・・では、半年後を楽しみにしているよ」とだけ告げた。

『ええ、必ず！・・・もしかすると、夢の中ではなく、それより前に現実の世界でおじ様と再会できているかもしれないね。』

「そうだね。」

そんな日は来ない気がしてならないけれど。

『では、また。．．．本当に本当におじ様が戻っていらっしやるのをお待ちしています。いつまでも。』

「ありがとうございます。そして、御誕生日おめでとう。直接祝えないのが残念だね。不甲斐ない【おじ様】ですまないね。」

『いいえ、いいえ。では』

『．．．．．．．．．．』

少女の声がフェードアウトし、光は唐突にぱっと姿を消した。

後には昨日と同じ、静寂とどこも知れぬ光景がイレイを取り囲んでいた。

消える直前、少女が

『私があんなことを願ったから．．．』という言葉が聞こえたことが気になったが、恐らく自分が遮った言葉の続きだろう。

本当に気にする必要などないのに。

こちらの世界の一日が半年、という事実をしまった時、あの少女との年の差が縮まるかもしれないと、わずかにでも喜びを覚えてしまった男のことなど。

忘れてしまえばいいのだ・・・。

03・醜い心・ヨウラside

ひかりがちらちらと点滅する。

イレイは目覚めない……。

『おじ様、おじ様……』

反応がないイレイに痺れを切らし、ふわふわと光は彼の顔の周りと飛び回る。

暫く待っても呼びかけに応えないイレイを見て取ると、光　ヨウラは諦めて空で留まった。

『おじ様……』

また半年、経ってしまった。

彼が、この世界に堕ちてから一年が過ぎている。

あの病の【原因】についてはほぼ特定されつつあった。

王の守護せし玉を持ち出したものがあるのだ。

すぐに犯人は捕らえたもの　無論、黒幕は別にいるにきまつている　既に、目的は達していたらしい。

宮では情報統制が敷かれ、そういった騒ぎについては伏せられていたが……やがて、あの原因不明の奇病が流行りだし、原因についての特定を迫られた時、漸く漏らしたのがその一連の騒ぎについて。

病、に症状が酷似していたため、「奇病」と呼ばれていたそれは、巨大な呪いだっただ。

「奇病」に冒されたものは、贅なのだ。

その大掛かりな呪いは、勿論王を狙ったもので・・・一年をかけての秘密裏の捜索の結果、一人の若者によってその呪い士は討たれたという。

都では勇者扱いでもてはやされていた。

ヨウラの旧友も新しい「勇者」に夢中だったが、ヨウラは黙って微笑んだだけだった。

「病」の原因も、それがもはや起こらない事態となったことも、そんなことはどうでもいいのだ。

ヨウラが望んでいるのは、既に眠りにつき姿を消した イレイの帰還だけだ。

事情を知るものたちは、ヨウラに諦めるという。その度にヨウラは頑固に首を振った。

普段優しげで人当たりのいい彼女にしては珍しい所作に、苦笑しつつも仲のいい友人はそれならばと好きにさせてくれた。

「おじ様・・・。」

燐光が散った。

光は急速に弱まっていく。

時間だ。

「また、半年後・・・。」

半年、なんて長い。

彼女にとつての半年は、イレイにとつてはただの一日。年の差が、詰まっていっく・・・。

ああ、きつとこれはヨウラが願ったからいけないのだ。

早くイレイに会いたいと願う一方で、19離れていた大きな差が、徐々に詰まっていくなかに、彼女は喜びをどこかで抱いている。

なんと、あさましい。

「おじ様、わたくしの醜い心をお許しくださいます。けれど・・・わたくしの身にかえてでも、おじ様はこちらに戻しますから・・・どうかそれまでは・・・」

健やかで。

眩くと、少女の声がフェードアウトし、光は唐突にぱつと姿を消した。

04・喪つたもの：I l e i s i d e

目覚めて、どうしようもない喪失感に胸を焦がした。

「ヨウラ？」

返事はない。

声が聞こえた気がするのだが、彼は夢の深いところに囚われているようで、彼女を求めて手を伸ばしても届かなかった。ずぶずぶと自分の身が沈んで行き、暗闇に溺れたところで目が覚めたのだ。

「ヨウラ？」

ふと、目を落とすとスーツのジャケットに光る粉のようなものが付着しているのが見えた。

手に取るうとすると、ぼう、っと光って色をかえすつと溶けるようにかき消える。

「まさか・・・！」

がばりと身を起こした。

見上げれば、日は高いところに。相変わらずどんよりした空に、ぼっかりと白い日が浮かんでいた。

昨日、ヨウラの声でおきた時間より、多分明らかに遅い。もし体内時計と日の高さが正確に時を刻んでいるのであれば、だが、時をはかる指標が、体内時計と、日の高さだけのこの世界では、時間という概念が曖昧だ。

「行ってしまったのか・・・。」

おそろくは。

きつと時間ぎりぎりまで粘って、反応のない自分に諦めて帰ってしまったのだ。

この触れようとすると次々消えていく、光の粉はその名残。あきれただろうか？

必死であちらの世界に自分を戻そうと奔走しているだろう彼女のことを思うと胸が痛んだ。

彼女が呼ぶならば、例えどんな場所においても応えたいと願っていたのに。

自分は、ずっと眠りの海に沈んでいたのだ。

また半年。彼が姿を消したと言われる時間から、一年がたっているはずだった。

次に会えるのは、彼にとっては明日、彼女にとっては一年半後のことだ。

昨日は彼女が11になったと聞いていた。

順当に行けば、次は彼女が12になったときか。

12歳。

そろそろ体も成長し、大人の気配を見せ始める頃。

どれだけ大きくなっただろう。美しくなっただろう。

けれども、その彼女を見ることはかなわない。

依然として、イレイは彼女の手が届かないところにいるのだから。彼が12歳の少女を見つめる機会は、ここにいる限り永遠に喪われたまま。

大きく、息を吐き出した。

諦念と、わずかに絶望をこめて。

05・絡めた指先：イレイside

『おじ様、起きてくださいな。・・・半年前のようにには参りませんわよ。』

揺さぶられ、耳元で声がする。

「ヨウラ、すまない・・・私は・・・ヨウラ?!」

勢いづいて身を起こす。

あれは、夢だったのだろうか？

自分が夢に囚われて、ヨウラのいない殺伐とした世界にいるというあれは。

『はい、わたくしです。・・・おじ様、お目覚めでして?』

漣のように空気が震えて揺れる。

笑っているのか。

「ああ。」

少し眠気がかすむ意識を覚ますように、イレイは首を振る。

クリアになっていく意識と視界・・・それが、奇妙なものを捕らえた。

「・・・ヨウラ、なのか?」

イレイの視線は目の前の少女の手に釘付けになった。

光でできた、少女の手「のみ」が中空に浮かんでいる。

『ええ。・・・わたくしですの。恐ろしいとお思いにならないでくださるとよいのだけれど。おじ様には、きつと手だけが浮いてみえるのでしょぅね。』

「ああ、そのように見えるが、お前だと思えば怖くない。どうしたのかね、これは？」

「おじ様をこちらにお呼びする方法は未だに見つかっておりませんの。けれど、逆に私が一時的にその界のものに触れることはできるようになりましたのよ。」

「界？」

「ええ、そこは夢の中・・・に似た非常に特殊な空間ですの。わたし達のいる世界と、神の住まう世界、その間に虚ろに開いた何もない場所に作られているようですの。」

「人口なのか？」

「人為的に生まれたのか、という意味でしたら肯定いたしますわ。でも、そこはもう独立した空間になっておりますのよ。もう人の手を離れ、外部からは手出しできない空間となってしまうたようですの。変質したようですわね。」

「変質。」

「ええ、もはや異質な空間。そこを、界とわたくし達は便宜上呼んでおります。现阶段では、どうしても、そちらからおじ様をお呼びすることができませんでしたの。でも、逆ならば・・・わたくしがそちらの世界に呼ばれるのならば・・・且つ一時的という制約の上であれば可能です。それが今わたくしがやっていること・・・まだ、不慣れですので、手のみが精一杯でしたわ。」

悔しげな響きを声に乗せて、ヨウラは語りかける。

「無理はしなくてもよいのだよ？」

「いいえ、わたくしが、したいことをしているだけですわ。」

「・・・そうか、お前も大分大きくなったのだろうね。」

大人びた口調はもとからだだが、すこししっかりとした芯が見えるようになつた気がする。

きつと、大きくなったことだろう。

体も。心も。

『ふふ、この一年で10cmは伸びましたわ。このまま伸びたらおじ様の身長を抜く日もくるかしら?』

「ふむ、それはいけないね。どんなお前でも可愛いとは思うが、お前に見下ろされたら、私がお前に勝てるものがなくなるではないか。」

『あら、おじ様ったら、身長以外でわたくしに勝てるものはおありでないの?』

「思いつかないね。お前にはいつもこっぴどく叱られてしまうじゃないか。」

『殿方が情けないことをおっしゃらないで』

「世の男は、女性には勝てないようにできているのだよ。」

『あらあら』

「・・・だから、お前にこうして苦勞をかける。」

そつと、光でできた手に触れる。

「暖かいのだな。」

瞠目して、イレイは手を離した。

『ええ、外見こそは光でできているように見えますけれど、もとはわたくしの手ですもの。熱も感触もそのままですわ』

「そつか」

『ええ。・・・ねえ、触ってください。おじ様がそこにいることを感じたいの』

感じたい。

イレイの頬にわずかに朱が走った。

一瞬で消え、わからない程度ではあったが。

『おじ様?』

「ああ、すまない。・・・では、少し借りるよ?」

『ええ、どうぞ』

そっと、ヨウラの手を自分の手でとった。

淫らな想像を一瞬でもした自分を恥じるように、そっと。

神聖なものを扱うようにそっと、丁寧に触れる。

『・・・くすぐりたいですわ。もっとしっかり握ってくださいな』

「し、しかし。」

『割れ物でもございませんし、そんなに力を込めなければ折れるものでもありませんわ』

「そ、そうかね。」

『おじ様だったら、女性の扱いに慣れていると思ってましたのに。そちらにいつている間に忘れたんですの？』

くすくす、と笑い声が聞こえる。

「それは言わないでくれ。・・・耳に痛いから。」

『ふふ、さ、お願いですわ。握ってくださいまし』

「わかった。・・・痛くないかね？」

さし出されたヨウラの手を握った。

握り返されるようにこめられた軽い力に、イレイは懐かしいものを思い出した。

よく、こうして手を握って連れ歩いたものだ。

その時よりは、もっと力が強くはなっているけれど、かわらない。

『昔を思い出しますわ』

同じことをヨウラも思ったようだった。

「昔・・・確かに、一年半は前だろうが、昔、かね？」

『ええ、わたくし12ですもの、自分の10分の1ほどならば、昔といってもいい気がしますわ』

「そうか・・・お前にとってはそうだったな。」

目を伏せる。

19歳・・・いや、今は17歳の差か。29の自分と、今は12になるヨウラ。

その年の差を、こういうときに思い知る。

彼の人生の3分の1ほどしか生きていない小さな少女にとって、一年半はどれだけ長いことだろう。

けれども、こうして、彼を探して、彼に手を差し伸べてくれようとするのだ。

握った手を、開いたほうの手でそっと包み込んだ。

小さな、この手で。

どれだけの苦労と、どれだけの努力をして、ここまでたどり着こうとしているのだろう。

『おじ様も、暖かいですわね。そちらは、寒くありませんか？』

「ああ、過ごしやすい気候だよ。お前はどうかね？」

気候だけは。

少女に問いかけながら、頭の中でそう呟く。

寒々しいのは目の前に広がる光景だ。

『大丈夫ですわ。病とは無縁の体質ですの』

「それは重畳。・・・そういえば、正確な時間はわからないが、お前はもう12の誕生日を迎えたのだろうか？」

彼女に見えるのは約半年ごとであるから、そろそろのはず。

『いいえ。でもあと僅かで時を迎えますの。その時は祝ってくださいます？』

「勿論。・・・それまでいられるのかな？」

『ええ。後ほんの僅かですもの・・・おじ様も一緒に数えてくださる？あと30、29、28・・・』

慌てて、彼も声をそろえる。

「25、24、23、・・・5、4、3、2、1」
包み込んでいた手の平中で、ヨウラがきゅっと緊張したのがわかった。

「御誕生日おめでとつ、ヨウラ！」

「ありがとつ、おじ様」

「12歳か・・・お前もあとほんの少しで大人の仲間入りするのだね。」

「その時が待ち遠しいけれど・・・その時は、きっと、きっとおじ様も一緒ですわよ」

「・・・そうだね。」

「勿論ですとも！そうに決まっているわ。・・・ねえ、おじ様」
「なんだね？」

「誕生日のお祝いに、一つお願い叶えてほしいんですの」

「今の、私にできることならなんでも。」

その場にいれば、たとえどんな無茶でも叶えてやりたい。

この身ではそれはかなわないけれど、できる限りのことはしてやりたかった。

「それでは 手を開いてくださいませ」

「手を？」

言われるまま、ヨウラの手を包み込んでいた手を離し、広げる。

「指も広げてくださいませ」

「こつ、かね？」

「ええ、そのまま・・・」

そつと、ヨウラの小さな手のひらが重なった。

先ほどとは違い、指先はイレイの指と指の間に挟まるように入っていく。

「ヨウラ？」

狼狽して、振り払いそうになった衝動を慌てて抑えた。
どうしたというのだ。

『わたくし、12になったから、少し大人の気分を味わってみたい
んですの。わたくしにはまだまだ早いから、恋人はおりませんのよ。
だから、お目付け役のおじ様が、代役を務めてくださいますし』

小さな手と、大きな手の指がそつと組まれた。

「そんな光栄な役目を私に授けてくれるというのかね？」

本音とは裏腹の優しい声。

本当は、心の中は乱れていた。

困惑と、狼狽と、嫉妬と、優越、歓喜と・・・様々な感情が心の
中でぶつかつて、不協和音を奏でている。

思いを寄せている少女からの提案は心が震えるほど嬉しいのに、
何故こんなことを、と思う自分がいる。

いつかこんなことを、他の男とする少女を想像して、煮えたぎる
ような怒りがある。

複雑な感情。

こんな感情を少女に抱く資格など自分にはないのに。

『勿論ですわ。・・・わたくしが消えるまで、こうしてくださいま
し。お願い、聞いてくださるかしら？』

「ああ。喜んで。」

そうして、少女の手の形をした光が消えるまですつと繋いでいた。

囁くように、

「では、また半年後。次はもつと・・・。」
と告げて、少女の声はフェードアウトし、消えた。

消えた後、少し。

少しだけ、彼は泣いた。

女々しいと想いながらも、一条の涙の筋が零れ落ちることをとめられなかった。

06・触れ合い：ヨウラside

「今日は手首までなのだね。」
『ええ、なんとかここまで』

ヨウラの従兄　イレイがここにきて覚醒してから5日が過ぎようとしていた。

その間、ヨウラの世界では2年の時が経過している。
背も伸び、女性らしい体つきへと彼女は変わろうとしていた。

子供っぽく小さくてもちもちとしていた手の平は、ほっそりと女性らしさをにじませるようになっていた。

イレイの固くがっしりとした手を握るにつけて、自分の子供っぽさが強調されるように感じてがっかりしていたから、それは嬉しい。

けれど、切ない。

その間、慕う相手と会話は交わせど、顔を見ることができていないのだから。

想いは叶わないと承知している。

自分など、イレイから見ればほんの子供にすぎないのだから。
けれども。

せめて、姿形とも捉えたいと思うのは、贅沢だろうか。

薄ぼんやりとイレイの姿を意識で捉えることはできるのだが、あくまでぼんやりとしか捕らえることができない。

例えて言うなら、曇り硝子の向こうにいる人影といったところだ

ろっか。

かろうじて身振り手振りはわかるものの、輪郭の滲んだ様子で、はっきりと見ることはできないのがじれったい。

『おじ様からは、私の手首までははっきり見えますの？』

気になってヨウラは尋ねた。

ひよっとすると、イレイから見ても薄ぼんやりとした手首なのだろうか？

「いや、そんなことはない。・・・お前のほうからは良く見えないのかね？」

『ええ、動いている様子は捉えられるのですが、はっきりと見ることはできないんですの』

それがなんと残念なことか。

『ねえ、おじ様。』

ふと、思いついた。

「なんだね？」

『おじ様のお顔を、触らせてくださいませんか？』
いい思い付きだと思った。

目で直接、見ることはかなわない。

ヨウラの今の力では、どうしてもできない。

でも、触ることならできるはずだ。

「・・・構わないが、面白いことなどないと思うよ。そういえば、髭もはえてこないな。面白いものだ。」

『では、わたくしの記憶にあるままのおじ様のお顔なのですな』

「おそらくそうなるな。泉に顔を映してみたのが、もし正しい像だとすればだがね」

『確認しても、よろしいかしら？』

「ああ、好きにするといい。」

『ふふ、嬉しい……。かがんでくださる?』

「わかった。……こんなものでどうだね?」

イレイの手が伸びる。

誘導するようにヨウラの手を引き、自分の頬に添えた。

ちょうど良い位置までかがんでくれたらしく、背伸びしなくても届く位置にイレイの頬がある。

促されるまま、ヨウラはイレイの輪郭を指先でたどった。

間もなく30に届こうとする青年の肌とは思えない肌理に少し嫉妬する。

『おじ様、殿方ですのに、お綺麗なお肌ね。少し妬けてしまうわ』

「ヨウラのほうがずいぶん綺麗な肌をしているとおもうがね。」

『それは気を使っているから当たり前ですわ。……おじ様なんて、気を使っていらいっしやらないのに、そのお年でそのお肌だなんて不条理ですわ』

明日から今まで以上に肌の手入れの時間を増やさなくてはいけない、などと頭の隅で考えながら、そろそろと指を滑らせていった。

『危ないから目は閉じてくださいませ』

何しろ、彼の顔を手探りしている状態なのだ。うっかり指が目にも触れたらたまらない。

「それはもうしているよ。……なんだかくすぐつたいものだね」

『我慢してくださいませ』

くすくす笑いながら、頬、頬谷、額、鼻と指先を動かしていく。

瞼の上を通り、頬骨　口まで届いたところで。

『おじ様!?!』

びっくりして手を引いた。

指を、舐められた。

「はは。……いや、どんな味がするのかと気になってね。」

流石に生身ではないせいかな汗の味はしないのだな、と呟くイレイの聲が耳に届く。

『い、悪戯はしないでくださいませ!』

イレイに顔が見えなくて良かった、と初めて思った。きっと真っ赤になっている。

頬が熱い。

「悪戯ね。．．．ごういうことかね?」

その瞬間、背筋にぞくりとしたものが走った。

指の先をイレイに銜えられている。

舌先でなぞられて指の股を舐められ．．．。

『っ．．．ふ．．．おじ．．．さまっ!』

びくり、とヨウラが身を震わせた。

『やめ．．．』

「．．．やめたよ。．．．ちょっと悪戯が過ぎたかね。」

『お戯れが過ぎますわ!』

イレイから腕を引きはなした。

見知らぬ感覚が身を走ったせいなのか、鼓動が早い。

「すまない。悪かった．．．許してくれるかね?」

『おじ様が、きちんと謝ってくださいだったので許しますわ。でも、今度お会いした時にパフェを奢って頂きますよ』

「お安い御用だ。なんなら、他にケーキをつけてもいい。」

『そんなに食べられませんわ』

「そうか。」

『ええ。でも、約束ですよ』

「ああ、勿論お前に会えたら、その時は好きなだけ奢ってやるっ」
『楽しみにしております。さて．．．そろそろ時間ですわね』

光が薄れていくのを感じる。

これ以上、イレイに触れ続ける事はできない。ヨウラの力はそれ

ほど強いものではないのだから。

こうやって、彼と触れ合うことができるようになるだけでも、長い時を要した。

「そのようだな。」

『次はまた半年後』

「・・・そうだな」

僅かにイレイの声に寂しさが含まれているように感じた。それも当然だろう。

イレイのいる場には、何者の姿を感じ取る事もできない。

聞けば、人がふらりと通りかかる事はあるのだというが、話しかけても要領を得ないばかりか、襲い掛かってくることもあるのだという。恐らく、イレイと同じように『奇病』に冒されたもの達なのだろうが、既に正気を手放しているという所だろう。

イレイも彼らの様に正気を手放す日が来るのだろうか。やがては、ヨウラのことも忘れてしまつかもしれない。

ヨウラの胸に何かがこみ上げてくるように感じた。それを吐き出さたくて、口を開く。

『わたくし、おじ様に伝えたいことが』

「なんだね？」

けれども、結局喉元までせり上がってきた言葉は音にならなかった。

諦めて一度口を閉ざし、首を振った。

『いいえ、いいえ・・・やっぱり忘れてしまいました』

「そうか。」

『ええ。いつか思い出したら聞いてくださる？』

お慕いしています、と。

届かない思いだとはしっている。

あれだけ綺麗な大人の女性に囲まれていたイレイだから。こんな

子供が彼のことを思っていると知っても笑われるだけだろう。

「勿論、お前が言いたいことならばいくらでも。」

『お願い、いたします』

ふわり、とヨウラは微笑んだ。

イレイには見えないだろうけれど。

「ああ。勿論約束だ。そうだ、消える前にまた手を貸してくれるかい？悪戯はもうしないから。」

『悪戯をなさらないなら、どうぞ』

そつとイレイの前に手のひらを差し出した。

「手のひらではなく、甲の側を向けてほしい。・・・そうだ」

そつとイレイの手のひらが添えられ、持ち上げられる。

イレイの唇が手の甲に押し当てられた。

「私の姫君に祝福のキスを。お前がそちらの世界で幸せに過ごせるように」

イレイの声がかんたんフェードアウトしていく。

最後の一音を耳が拾い上げると同時に、世界は断絶した。

こちらと、あちらの夢の世界とは、関わりのない状態へと戻る。

また、半年後まで。

遠い半年後を思っ、ヨウラはイレイの唇が当てられていた場所へ、そつと自分の唇をあてた。

07・輪郭の滲んだ夢：イレイ side

泣き顔が、目裏に浮かんでは消えて行く。

すまない　彼は一言それを口にするのが精一杯で。

泣き顔の彼女が何かを言った。

聞こえない。彼が叫んでいるのに、彼女は口をつぐんだまま首を振る。

そうして、彼女の手は離れていった。

イレイは勢いよく体を起こした。

寝ていたのか。不自然な体勢で横になっていたのだろう、全身あちこちがきしむ。

日付の感覚が、ここ最近曖昧になってきている。

昨日はここに来てから何日目、今日が何日なのか。

目覚める前にみた悪夢で気分も最悪だ。

「まずいな・・・。」

彼女の声で目覚めるのが当たり前になりつつあった数日のあと、ぱたりと彼女が姿を見せなくなった。

彼の時間においては多分2、3日。

しかし、彼女の世界では一年以上の時間が　もしかするともっと　流れているはずだった。

ふと天を仰いで見ると、日は中天に差し掛かっている。

彼女は今日も、まだ現れない。

今までは、まだ日がさほど高くない時間に現れていたというのだ。

彼女はそろそろ14歳の年を数えようとしているはずだった。もし、時間の流れが一定なのであれば。

生憎と、確かめるすべは無い。それを教えてくれるはずの彼女が、姿を現さないのだから。

ひよっとすると、あちらでは10年の月日が経っていたとしても、おかしくは無い。

そう、彼女が姿を見せないのもそういう理由かもしれない。

正気を失った者に襲い掛かれ、追い払うこと数回。

それ以外には特にやることなどない日常に、彼は飽きはじめていた。

(このままではいずれ狂うかもしれない)

そんな思考が時たま彼を苦しめた。

変化のない日常。

ここには何も無い。あるのは枯れた草と地面と石だけ。

ここにいっても特にやることもなく、かといってここを離れるのも憚られた。

ヨウラとの繋がりが絶たれたらと思うと、場所を移すことが怖いのだ。

この場に居ても、彼女に会えるとは限らないのに、それでもかすかな希望を捨てきれない。

腹はすかなかった。

これだけの日数が経過しているにも関わらず、食べ物はおるか水すら口にしなくても、彼はまったく飢えを感じていなかった。

夢の世界だからだろうか？

その癖、痛みだけは感じるのだから面白いものだ。

一度、襲い掛かられた時に軽い擦り傷を負った。

さほど深いものではなかったが、じくじくとした痛みが少しの間彼の身にとどまった。

頬をつねってみれば、これまた痛い。

夢の中で頬をつねれば痛くないというのが定石なのではないかと思っただけ。

実はヨウラと過ごしたあの日常こそ夢で、彼が今いる世界が本当なのではないかという気にすらなってくる。

そう、ひよっとしてこの現実から逃れるために彼が生み出した幻なのではないかと。

「ヨウラ・・・」

さすがのような気持ちで彼は片膝を突き、首をたれて指を組んだ。祈るという行為は彼は余り好きではない。

にもかかわらず、せずにはいられない気分だった。

自分が今ここにいて、そしてヨウラという存在が彼の妄想でもなんでもないことを証明して欲しい。

「ヨウラ・・・」

もう一度名を呼んだ。

自分を忘れていいといった癖に、ざまあない。

あの時は自分の存在をしっかりと保っていたからこそその言葉だったのだと。

今、彼は思う。

自分の存在すら危うく、さらに彼女が夢ではなかったかと不安だった。

何しろ、彼女という存在が彼の傍にいた証拠が、何もないのだ。

写真一枚すらない。

まして、仮に彼女が夢ではなかったとしても　もう、会える保証もないのだ。

そう、彼女は彼を忘れてしまったのかもしれない。

彼女のほうも、イレイなど夢幻だったのだと。

そんな人間はもともといなかったのだと。

そう、思い込んでも不思議がない時間が、彼女のほうでは流れて
いるはずだった。

イレイは空を仰ぐ。

叶うならば　後一度でいい、彼女に会いたい。

彼が正気を手放す前に。

08・過ぎ去った時間の重さ・・・ヨウラside

葬送の鐘が鳴る。

七年目、という言葉が重くのしかかった。

ぼーんぼーんぼーん。

「貴方ったらまだ諦めていなかったの！」

信じられないわ、と友人 シオーラはあきれた顔をした。

「だって、おじ様はまだ生きていらっしやるもの。」

頑なにこの7年言い続けた言葉をヨウラは繰り返した。

そう、彼は生きているのだ。

諦められるはずなどない。

唇を引き結んで挑むようにじっと見上げるヨウラに、シオーラは深いため息を一つ吐き出した。

「また、それ？いいでしょう、仮に貴方の”おじ様”が生きているとして、さあ、どこにいるの？夢の中？」

・・・誰がそれを生きているっていうのよ。人はそれを思い出というの。貴方ったら若くて美人なのにすっかり

しよぼくれた未亡人みたいに、亡くなった人に操を立てて！」

「まだ亡くなつてはいらっしやらないわ！」

「亡くなつたも同然よ。・・・例の病で貴方の”おじ様”が消えたことは聞いたわ。でもね。7年なのよ。7年ってどういうことかわかる？」

人は失踪して7年経つたら死んだものとして扱うっていう法律があるのをご存知？」

「……。」

「ねえ、ヨウラ。もう7年よ。7年ってどういうことかわかる？赤ん坊が生まれてから初等学校に入るくらいなの。」

「10歳の時から17のこの年まで、よく頑張ったわ。……でもね、諦めなさい。」

シオーラはヨウラの手を取ると、鏡の前まで引つ張っていった。

「身長はどのくらい伸びた？体重も変わったでしょう……すっかり年頃の娘らしい体になっているもの。しかも、極上のね。」

全くこの胸！羨ましいと思ったらないわ！……それから……。」

この長い髪、とヨウラの長く長く伸びた髪を彼女は持ち上げた。

「確かに面影はあるでしょう。でもね、7年経ったらもう別人もいところよ。特に10歳からの7年なんて成長期じゃない。17歳だなんて、一番の花盛りじゃないの。ねえ、現実を見なさいよ。貴方のおじ様の思い出は綺麗に胸にしまいこんで、新しい出会いを探すべき時よ。」

手始めは今夜の夜会よ、と張り切る友人に、ヨウラは残念だけど、と首を振った。

「今夜は駄目なの。」

「……今夜も、に訂正なさい。……全く。貴方は本当に強情ね。」

しょうがない人、とシオーラは苦笑して引き下がってくれた。

「ごめんなさい。」

「だったら、夜会の一つや二つ出なさいよ。貴方を紹介してくれって言われてるのよ？」

「……それは……。」

「はいはい。……全く、それじゃあ、代わりに今度私と一緒に舞台を見に行きましょう。それならいいわね？」

「ええ。それならば、お約束するわ。」

「約束よ？……また、連絡するわ。」

「ええ、お待ちしているわ。」

「・・・程ほどになさいね？体壊すわよ。」

去り際、少し痛みを堪えるような顔でそれだけ言い捨てて、シオ
ーラは去っていった。

「ほどほどに・・・ほどほどってどれくらい？時間はもう余り残さ
れていないの。」

ヨウラの囁きは誰の耳にも届かず、空気を揺らしたただけだった。

+ + +

「ジョゼフ！バツグラが亡くなったそうよ！」

「それじゃ、明日、送別の儀式かい？」

「多分そうだろう。手伝いを送ってやらないといけないな。」

「ああ、俺の所もそうするでしょう。しかし、あのジョゼフがね。」

「全くわからないものだねえ。」

ざわめきの中に投げ込まれた言葉。

一瞬静かになったかとおもうと、何倍にも大きくなったざわめき
が広がっていく。

今夜の夜会は年齢層が余り高くない。

堅苦しくなくていいが、しかし、一人の生命の終焉を語るには少
し浮つきすぎだ。

「明日は大変だろうね。」

少し興奮したような顔の青年に、シオーラは返事の変わりに黙っ
て微笑んだ。

7年前の【病】が脳裏に蘇る。

あの病を止めた「勇者」が今夜なくなったというのか。都に広がった奇病。その原因となった呪いを止めた彼。七年が経過したが、それでもまだ若かったはずだ。死因はなんだろうか。

病気にかかっているという噂は聞いていなかった。事故だろうか。

(なににせよ、私には関係ないけれど。ただ…)

今夜の夜会も顔を出さなかった可憐な友人を思い出し、シオーラは俯いた。

彼女はこの知らせをどうやって受け止めるのだろうか？

「そう、ジョセフが。」

淡々とヨウラはその言葉を受け止めた。

街中に広がった話は、ヨウラの耳にも間もなく届いた。

「今夜が式だそうですね。お嬢様は顔を出されますか？」

「いいえ、私は結構よ。」

「然様ですか、畏まりました。差し出がましいようですが、あの、今夜も……？」

「……何か問題でも？」

「……いいえ。使用人にそのような言葉は許されておりません。」

「……許されていたら、何か言いたいこともあるのかしら……？」

「いいえ、お嬢様がしたいことであれば口を挟むことなどございませぬ。」

「そう。……では、下がって頂戴。」

「……はい、畏まりました。」

深々と頭を下げ、この家に長く勤める執事は下がっていった。

彼の本来の主は、自分ではない。

自分は引き継いで守っているだけだ。

彼の主人はイレイであって、自分ではない。

それなのに、あの執事は自分に仕え続けてくれている。

「あの・・・」

「はい、何か？」

ヨウラの言葉に従って下がろうとしていた執事を引き止める。

「あの、ありがとう。そして、ごめんなさい。」

ヨウラの言葉に執事は少しだけ口元をほころばせた。

そしてそのまま無言で一礼して下がっていった。

「ジョゼフが・・・」

自分以外誰もいなくなった居室で、ヨウラはソファに体重を預けてもたれかかった。

これでイレイに繋がる鍵が又一つ減っていった。

時間はもう余り残されていない。

それがさらに減っていった。

「今夜、やるしかないのね。」

ドレスの長い袖に隠されていた左腕を、ヨウラは肘までむき出しにする。

奇妙な文様が緻密に描かれていた。

この7年掛けて徐々に徐々に増やしていった、それは魔法陣だった。

葬送の鐘がぼおーんぼおーんと音をたてた。

街中に響き渡るそねは、まるで泣き声のようだった。

9・始動：ヨウラside

* * *

イレイが姿を消して一年を経った頃のことだ。

ヨウラは決心して宮に向かった。

【巫女】を訪ねる為に。

彼女の力を借りなくては、ヨウラの望みは叶えられそうに無かったからだ。

先代であるヨウラとて、現職の【巫女】を訪ねてもすぐ会えるわけではないはずだったが、ヨウラと仲が良かった現【巫女】は本来は難しく煩雑な手続きを経た上でなくては対面できないという慣例をこっさり破り、すぐに対面できるように取り計らってくれた。

現れた【巫女】は記憶の中にあつた彼女の姿よりも、だいぶ成長したことが伺える姿だった。

ヨウラが【力】を譲り渡したのは10歳を迎える少し前。

一年以上前のことだ。

そのとき、【力】を受け入れた彼女はヨウラより3つ下、7つを迎える少し前だった。

この年頃の少女は一年も経つとどんどん変わっていくのだから、ヨウラの記憶の中の彼女の姿と一致しなくても不思議は無い。

寧ろ、一致していたら成長の遅れを心配するところだった。

そんなことを思っていたせいだろうか、挨拶が遅れてしまった。

ヨウラより先に、【巫女】が口を開く。

「お久しぶりですね、先代様」

今はヨウラより立場が上であるはずの【巫女】に先に挨拶をさせ
てしまうなど、明らかな手落ちだ。

【巫女】を勤める少女は、総じて早熟で聡明な者が選ばれる。
儀式に関わる膨大な知識を、幼い少女が修めるのだ。本来成熟し
た大人の身でも難しい。

しかし、候補になれる条件を満たす少女はいずれもそれを可能と
していた。つまり、先代であるヨウラも。

【巫女】を勤めていた際に、礼儀作法についても厳しく教えを受
けた。

その教えを守るならば、彼女よりも立場が上である彼女から挨拶
を受けるなど、あつてはならないことのはずである。

「……っ。巫女様！ お久しぶりです。そして、ご挨拶が遅れて
申し訳ありません」

ヨウラは深々と頭を下げた。

「まあ、頭を上げてください！……まったく、先代様は本当
にマジメでいらっしゃる」

現【巫女】 フィンはくすくすと笑い声をあげた。

「ここには世話役のマジエンダも居りません。楽にしてらして？」

言われてほつと肩の力を抜く。そして、ヨウラも笑った。

「マジエンダに見られていたら、きつと叱られていたでしょうね。

もしかして、予想して席を外させてくださったのかしら。感謝しま
す、巫女様」

すました顔でヨウラは礼をする。

「そうよ、わたしは【巫女】ですからね。予想してマジエンダの席
を外させておくなど造作ありません」

すました顔でフィンも応じる。そして、お互いぶつと吹き出した。

「……マジエンダは相変わらずですか、巫女様？」

「ええ、相変わらずのカタブツよ。わたし、毎日のように叱られて
るの。先代を見習いなさいって」

「まあ、わたくしの時もそうでした。彼女の中で許される完璧な作法を収められる者は、きつと記憶の中の美化された『先代』だけに違いありません」

「ええ、きつと」

そしてまた二人でくすくす笑った。

相変わらずな様子のマジエンダ　過去、ヨウラの世話役も勤めた老女　の様子がおかしくもあつたし、お互いに共通の話題を話すことでぴんと張っていた緊張が緩んだからでもある。

「マジエンダが相変わらずなようです。巫女様も相当な心労がありがたと思いますが、お元気そうでしたよ」

「ええ、マジエンダと毎日一緒にいるだけでわたしは齡8つにして、相当老け込んでしまった気がしますけれど、元気です。先代様は……少し、やつれましたね」

「そうでしょうか？」

「ええ……そのヤツレ具合と今回のお話、関係あるのでしよ？」

「お分かりになって？」

「わかりますとも……さて、ちゃっちゃんかお話してください。それを聞くために今回の時間を設けたのですから」

10・忘れられない忘れたくない：ヨウラside

「話はわかりました。先の『奇病』と先代様がそんなご縁であったとは……」

「ええ、そうなのです」

フィンには自分の親族であるレイが先の『奇病』により姿を消したこと。自分が彼をこちらの世界に呼び戻したいことを話した。

そして、その為に取り組むと考えている手段もまた。

「……いまだあちらに囚われた方々を開放する手段は見つけられていないと聞いております。先代様が仰られている、その方法をとれば、あるいは開放は可能かもしれません。けれど、先代様、本当におやりになるのですか？」

困惑したようにフィンは眉を寄せた。

ヨウラもその反応は予測済みである。

ヨウラとて、自分以外の者がこの手を取るなら困惑もしようし、止めただろう。

「ええ、わたくしにはもう【力】がほとんど無いのですもの」

「実行には長い時間がかかる事に加えて、かなりの苦痛を伴うと聞いております」

「ええ、わたくしも存じております。……わたくしも少し前まではく巫女>の座にあった身ですもの。【巫女】に伝えられる知識は全て、わたくしも承知しております」

それが儀式の下準備に過ぎないということも。

実際に儀式を行った後、ヨウラの身にどんな危険が降りかかるかわからないということも。

「そう、ですよね」

「【力】を殆ど失った身では試しても効果が得られない儀式ばかりで、今となつては多くが無駄な知識といえるかもしれません……」

「……これだけは別。これだけは今のわたくしでも……いえ、わたくしだからこそ、使えます。そして、今のわたくしが望みを叶える為にはこの手段しかない判断しました」

「……おそろくは、そうでしょう。力をお貸しするのは吝かではありません。例え誰が止めようとも、協力は約束します。……でも、先代様の身が心配なのです」

「ありがとうございます、巫女様……いえ、フィン」

「純粹に、ヨウラの身を心配してくれるフィンの厚意が嬉しかった。しかし、ここで踏みとどまるわけにはいかない。」

「どうしても、自分はイレイを忘れられないし……どうしても、会いたいのだ、もう一度。」

「見たい、触れたい、会話を交わしたい。」

「例え、女として傍にすることができなくても、『親族』としても傍にすることができればそれでよかった。」

「この身に刻まれる肉体的苦痛と、彼の人に会えない心理的苦痛とどちらが重いかと問われれば、ヨウラは後者のほうが重いと答えるだろう。」

「前者は耐えられるレベルの苦痛だ。」

「後者は……きつと、ずっとは耐えられない。」

「先……いえ、お姉さまがその身を削らなくても……いずれ、誰かがきつと解決方法を見出してくださるに違いないと思います……」

「それは何時？」

「え……」

「何時になるかわからない。そして、方法を見つける前に諦めてしまったら？……今回、界に囚われた者はかなりの数だと聞きます。けれど、国家単位で見れば大した数ではないと言え程度の人数ですもの。必死に方法を模索したが、どうにも力及ばなかった。それで片付けられてしまうという事はなくて？」

「……」

「わたくしが儀式半ばで他に彼らを解放することのできる方法が見つかればいいと思います。．．．．．けれど、もし。ずっと見つけることができなかつたときに、あの時やっていれば、と思いたくはないのです。やらなかつたということの後悔したくはないと思うのです」

「．．．．．わかりました」

「心配をかけてごめんなさい」

「いいえ．．．．．」

言葉を切つてフィンは首を振る。そして、ふつと表情を改めた。

「こちらからお願いします。先代様。．．．．．現【巫女】としてお願いします。どうぞ、彼らを救ってください。力及ばぬ我ら【宮】の者の代わりに。その為の協力は惜しみません。そしてどうぞ許してください。貴方を犠牲にせねば、道を切り開けない我らを」

本当は、とフィンは睫を伏せる。

「仰るとおり、【宮】では彼らを救うことは諦めかけています。わたしの力を使えば、もしかすると彼らの解放の扉を開くことができかもしれませんがという案も出ました。けれど、リスクが非常に高く【巫女】を失うかもしれない事態は認められないと言つてすぐさま廃案となりました。現在別の手を模索中ではありますが、芳しくありません」

その通りだ。先代【巫女】であったヨウラにもわかる。【巫女】はいなくてはならないものだ。

【巫女】はいわばこの国、いやこの地上に存在する万物を支える柱である。

それが倒れれば．．．．．。

過去、【巫女】が現職のうちに倒れたことがある。

その時に起きた大惨事は、長い時間が経ても癒しきれない傷跡を人々の心と、大地にいままだ刻んだままだ。

認められないという言い分はもつともだろう。

巫女はいなくなつたからといって、すぐさま別の者に挿げ替えられるという存在ではないのだから。

「このままでは彼らは永遠に界をさ迷う徒となるでしょう。先代様の申し出は渡りに船ではあるのです。……ごめんなさい」

「いいえ。かすかにこの身に残る【力】がお役に立てるなら喜んで……わたくしは、おじ様に会いたいと願うだけの利己的な考えの元で動いているんですもの。寧ろ、こちらの事情に巫女様を巻き込むことが恐れ多いことです」

畏まるヨウラに、もう！とフィンが口を尖らせた。

「恐れ多いという割りに、迷いはなかつたクセに。……愛しの『オジサマ』が羨ましいわ。お姉さまだったら、昔っからずっと口を開けば『オジサマ』なんですもの！フィンはずっくと嫉妬していたんですからね？！そこ、わかつてました？」

「え、ええ……と。……その」

「わかつてませんよね。知ってます。でなければ、あんなにオジサマ、オジサマ！って言うてらしたはずがありませんもの」

本当に、羨ましい。

フィンがため息をつく。

「物凄く羨ましいから、彼らを解放することが出来たら、是非噂の『オジサマ』をわたしの前につれてきてくださいね？」

「……ええ」

「ひっぱたいて差し上げますから！」

「ええ！？」

「こんなに思っついていらっしやるお姉さまをさしおいて、女遊びなんて何事ですか。年の差なんてなんのその。まして、本当の叔父と姪ではなく、本当は従兄妹なのでしょう？お姉さまと結ばれるべきで

す

「・・・フィン？」

「是非、つれてきてくださいね？」

「ええと・・・はい」

「お待ちしています！お姉さまを幸せにすると言わせるまでひっぱたかなきゃ気がすみません！」

「あの、冗談でしょう？」

それには答えずフィンは表情をきりりと引き締めた。真面目な話に切り替えるという合図だ。

「・・・おそらく、先代様の儀式が完成する前に、わたしは【巫女】を退くでしょうが、心配はいりません。後任の者にも引き継いでおきます」

「あ・・・」

「わたしもあと2年もすれば10になりますから。おそらく、あと一年もすれば新たな候補が見つかるでしょう。なあと、大丈夫です。先代様の魅力で、きっと私の後輩【巫女】もめろめろになるに決まっていますから、きっと喜んで協力を約束してくれるでしょう」

「ありがとうございます」

そうでなくても約束させます、とぼそりと呟いたフィンに、ヨウラのお礼の言葉は中途半端なところで途切れてしまった。

「フィ・・・、巫女様！」

「さあて、そうと決まれば。一月以内に儀式に入れる準備をします。準備出来次第連絡を入れますから。それまでお待ち下さいね？」

ぎゅっとフィンがヨウラの手を握る。

「お姉さまの為にフィンは全力を尽くしますからねー！」

呆然としたままのヨウラを置いてけぼりに、【巫女】フィンは方々に指示を出すために精力的に動き始めた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4522n/>

鏡の向こうのアシンメトリ

2010年10月25日21時25分発行